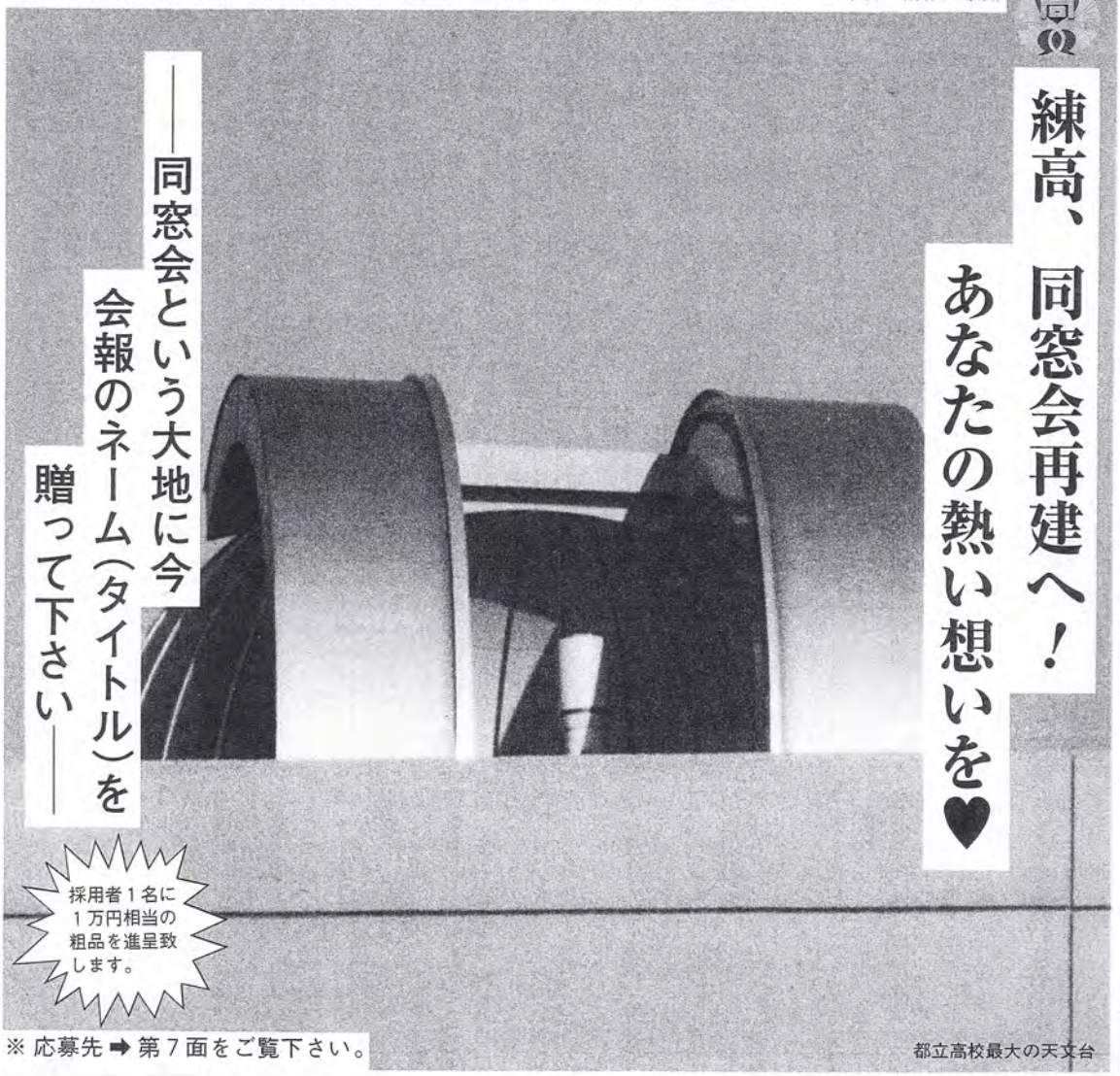
練馬高校同窓会会報

発行：都立練馬高校同窓会再建事務局　(〒179) 練馬区春日町4-28-25　TEL 3990-8643　印刷：情報出版㈱



※ 応募先 ➡ 第7面をご覧下さい。

都立高校最大の天文台

さぁ～全員集合！　同窓会総会(及び懇親会)

日　時　1994年5月29日(日) PM 2時～3時(予定)
総会が済み次第、ただちに懇親会へ突入します

会　場　練馬高校会議室(予定)、　　会　費　1,000円

議　題　1. コンピューター導入の件
2. 新名簿発刊の件
3. その他

〔総会での意見を交換するのは、もちろんですが、懇親会の場をクラス会や同期会の場所としても御活用下されば、なお幸いです。〕

今、甦えれ！練高同窓会(生)

第四代同窓会会長
伊藤　久雄
（十一回生）

会員の皆様がたにおかれましてはご健勝の事とお喜び申し上げます。

さて、この度、銀杏会では年1回、同窓会会報を発行することになりました。（これは93年度総会にて可決されております。）いま皆様がお読みになられている紙面がまさにそれでありますが、この場をかりまして練馬高校同窓会（銀杏会）の歴史と現状、及び問題点、対策を若干ですがお話したいと思います。

＊「銀杏会の問題点」

本同窓会もすでに24年の歴史を有する訳ですが、以下のような問題点を抱えております。

①活動休止状態が14年間もあること。この場合の活動休止とは総会が開かれない状態を指します。ただし、同窓会会則には、「会長は（原則的に）毎年5月の第2日曜日（母の日）に定期総会を開かねばならない。」とありますのでやむを得ない面もあります。しかし、総会が開かれないということは会員が意見を述べる場が保証されないということであり、現会長として深く反省をしています。

②①の結果としてクラス幹事会・理事会が開かれなくなったこと。ただし、幹事会・理事会が開催されなくなった原因には執行部交代の時にクラス幹事・理事の名簿引継が不十分であったことなどもあります。

③従って、同窓会に対する会員の要望が伝えられなくなり、活動が著しく停滞したこと。（同窓会崩壊と言ってよい）

④会報等がまったく出されていないので同窓会が何をやっているのか、あるいはやろうとしているのか会員・在校生に伝わらなかったこと。また、同窓生・恩師の消息など会員が一番知りたいであろう情報が提供されなかった。

＊⑤会計に余り余裕がない。幸いにも記念行事に寄付する以外に大きな出費がなかったので、いますぐ金銭的に困るということはありません。がしかし、これから同窓会として色々な事をするとなると将来的な財源不足が予想され、昭和44年度以降、据え置かれている会費の値上げも検討しなければなりません。

＊「対策」

①当り前の事ですが毎年母の日に総会を開きたいと思います。92・93年に開いた経験によると同窓生約九、三〇〇名に開催通知を出しても、実際に参加した人約20名という少なさ、また通知の郵便代だけでも約60万円かかるということはありますが、会員が自由に意見を言える場として、毎年、総会は開きたいと思います。

②クラス幹事会・理事会が機能しなくなっていることに関しては、総会に参加されたかたの中から臨事理事としてすでに10名以上の方に協力して頂いています。これからも新卒者は別にして、この方式を拡げたいと思います。

③会員・在校生に会の存在・活動を知らしめるために会報を年に1回発行致します。すでに出版代行業者である情報出版㈱と契約を結びました。今春より発行致します。

④また名簿に関しましては、一九八八年に加藤佳美会長の尽力により、最新かつ確度のたかい総合名簿が発刊されましたが、5年を経過しましたので、再調査の上、新名簿を発刊しました。そろそろ、注文された会員には届くころです。これも情報出版㈱より発行されます。

⑤会費の値上げに関しましては、同窓会の諸活動を総括し、不可避と思われる場合には総会に諮りたいと思います。

以上、簡略に述べてきましたが、要するに同窓会の活動は余り活発ではありません。私にも責任の一端はありますが、非常に若い同窓会で、伝統がなかった（引継ぎがまずかった）こと、執行部の年齢が若く公私共に多忙で時間が余り取れないこと、会員が会を余り必要としていなかったこと？にその大きな原因があると思われます。

とは言っても同窓会は必要です。私以下、執行部全員手弁当でがんばっています。歳を取って必要なときに同窓会がないなどということがないように是非会員の皆様がたの御理解と協力をお願い致します。

同窓会はこれから新たに歩みを始めます。同窓会を必要とする人・親睦を深めようという人が困らず、また楽しくつき合えるよう、基礎的なことを整備して行きたいと考えています。皆様がたの実際的なご協力（理事になる・総会に参加するなど）を切にお願いし、筆をおきます。よろしくお願い致します。

＊「銀杏会の歴史と現状」

年度	会長	活動状態
一九七〇(昭45)⇒一九七二(昭47)	加藤信司	通常
一九七三(昭48)⇒一九七六(昭51)	加藤信司	この間活動休止
一九七七(昭52)⇒一九七八(昭53)	加藤信司	通常
一九七九(昭54)⇒一九八〇(昭55)	鈴木恵司	通常
一九八一(昭56)⇒一九八二(昭57)	鈴木恵司	この間活動休止
一九八三(昭58)⇒一九八七(昭62)	加藤佳美	通常
一九八八(昭63)⇒一九八九(平1)	加藤佳美	この間活動休止
一九八九(平1)⇒一九九一(平3)	伊藤久雄	総会開催 総合名簿発行
一九九二(平4)⇒一九九三(平5)	伊藤久雄	この間活動休止
一九九三(平5)	伊藤久雄	総会開催 30周年記念 行事挙行
	伊藤久雄	総会開催 名簿発行準備中 会報発行準備中

会報の創刊によせて

校長　鈴木　一正

同窓会の皆様には、それぞれの道において伸びやかにご活躍のこと、心よりお慶び申し上げます。また、平素より母校の充実発展に多大なご支援・ご協力を賜っておりますこと厚く御礼申し上げます。

さて、この度、同窓会(銀杏会)会報が創刊の運びになりました。伊藤久雄会長をはじめ理事役員、会員の皆様のご尽力の賜ものです。心から感謝いたします。

昭和三九年四月に産声をあげた本校も、今年で創立三一年目を迎えます。第一期生は実年の四五歳になり、わが国の発展を双肩に担って活躍する要の年代に達しました。そして、沢山の卒業生が各界で優れた活躍をされています。このような時を迎え、同窓会報が創刊されますことは、誠に意義深いものと考えます。

総数九、二八七名に及ぶ卒業生の、本校での教育と伝統に育まれ、また、各自の弛まぬ研鑽をもって培った素晴らしい活躍ぶりが、会報を通して組織的に伝えられますことは、同窓の絆を一層強めるとともに、互いに切磋琢磨して益々の自己啓発に資するものとなることでしょう。誠に喜ばしいことです。

ところで、本校の近況をお知らせいたします。大きな変化が二つあります。

その一つは、昭和六二年の基本設計に始まった校舎等の全面改築が、平成四年三月に落成をみましたことです。機能と美しさを兼ね備えた誇れる優れた教育環境が整いました。

もう一つは、平成六年度から新学習指導要領が本格実施されることを機に本校の教育課程を抜本的に改善したことです。卒業までの九〇単位中三三単位分を自由選択とし、九四科目の自由選択講座設置をして、理系・文系・美術系をはじめとする多様な生徒の個性・進路に即した学習ができるようにしました。

それぞれ、社会の変化に主体的に対応できる人間形成を目指しております。

卒業生の皆様には、是非、機会を作って新しい教育の創造に燃えている母校を訪れ、激励下さらんことを願う次第です。

終わりになりましたが、この会報の編集に当たられました担当の皆様に心から感謝の意を表し、また、会員みなさま方の一層のご発展をお祈り申し上げ、創刊によせてのごあいさつといたします。

こ〜んなに新しくなった！練馬高校正面

私の同窓会顛末記（少々）

同窓会副会長　加藤　佳美（十三回生）

私の同窓会役員歴は、卒業した年からですので、もう十四年になります。初めは先輩たちと会を運営していくということでまだ学生気分の抜けきらない私は、はしゃいで理事会等に出席していました。先輩方は元気な人がきたとゆうことで安心したのか、総会後逃げられてしまい、翌年からを会計の一回生の加藤さんと二人でやり繰りしていくことになってしまいました。

母校の二十周年の時に記念品贈呈の承認もあり、総会を開催しましたが、この時は会長になっていて、母校の二十周年記念行事で同窓会会長の祝詞をとゆうことで、冷や汗をたくさんかき、節目の会長職は二度とやらないと心に決めました。

その後、一回生の加藤さんが米国勤務となり一人になってしまった私は、途方に暮れてしまいました……。

昭和六十年ごろ、母校の同窓会担当教諭の指導もあり、未整理となっている名簿の整理をしました。この時は、いきなり手紙で各幹事に作業を依頼しましたので、苦情の連絡をたくさんもらいました。これを期に名簿管理を業者依託することを検討し、のちに情報出版社と契約することとなりました。後日、同期会があった時この名簿が基になったと聞き、大変れしかったのを憶えています。

このあと幸いなことに、十一回生の佐藤さんが教師として母校に赴任し、役員を引受けてくれたことから、現伊藤会長とも出会うことができ、現在の理事役員の方々へと同窓会活動をつなぐことができました。

役員というよりは、書類保管係のような私でしたが、同窓会活動をなんとか次へと引継ぐことができたことで、よかったと、最近は少し肩が軽くなった気がしています。

'93年総会にて。中央が加藤佳美さんです。

「卒業生からの便り」

何もなかった

土屋　達行（一回生）

私達一回生が入学した昭和39年は、第一次ベビーブームの時で、学生数が今とは比較にならないほど多く、高校入学も大変な時代でした。入学志願者に対する受け入れ人数も少なく、高校新設の要望が高まった結果、誕生したのが、私達が学んだ練馬高校です。急こしらえの学校ですから、ほとんどの一回生は練馬高校がどこにあるのかすら知らず、入学式の日に都立第四商業高校の一部を間借りしていたというのが分かったくらいです。創立当時は6クラス（学生数300名）と、担任の先生だけという極めて小さい構成でした。それだけに私達一回生は、良い悪いはべつとして、まとまりはよかったと今でも言われます。また、当時は意識しませんでしたが、今考えてみると自由な雰囲気のなかで過ごせたと思います。当時の先生方には本当に感謝しています。クラブを作るのも、学園祭、運動会の開催も、何でも第一回でした。総てを自分達で作り上げていったことは、何物にも変えがたい体験だったと思います。卒後30年近くになろうとする私達一回生達は、各方面で中堅、あるいは中心として、このときの経験を活かし活躍中です。何もなかったところから作り上げ、壮年期に入った我々の練馬高校を次の時代に向けて、さらに大きく成長させたいものです。

練高の想い出

三浦　喜雄（九回生）

練高が30周年を迎えた。僕が卒業してからでも約20年になり、久し振りに母校へ足を運んだ。懐かしい先生方、友人、先輩達、後輩達。新しくきれいになった母校、学校のまわりもすっかり家が建ち、もうほとんど浦島太郎状態であった。そしてもっとショックだったのは、その〝なつかしさ〟の基になるべき同窓会が、事実上空中分解していたことだ。

卒業して20年も経つと、やはりなつかしい。過去をなつかしんでいるだけなのかも知れないが、社会の中で何がしかの役割を担うようになって、何かと利害が絡むような、人間関係の中で日々を送るようになると、そういった損得抜きで語り合える、かつ共通の話題のある集りは、とても大切なものになってくる。卒業生の全てがそうではないにしろ、皆で集ってワイワイ、ガヤガヤと一ときを過ごしたいと思う。

と、いうことで何とか同窓会を再建しようという人間が約10名集まり、細々といった感じながらも、会報を出すことになりました。7期の人達の〝同期会〟の報告が載っていますが、9期も何とかしたいと思っています。9回生及び9回生の関係者の方で協力して頂ける方のご連絡をお待ちしています。同窓会事務局もしくは三浦宛でよろしくお願いします。

練馬高校での思い出

鈴木　寿人（二十三回生）

練馬高校での3年間を思い返すと、受験を経て、入学式を迎える迄に何度となく雪が降った年に始まり、卒業式の日には途中から雪がちらつく印象ある節目は高校時代の沢山の思い出をより懐かしく、今年から公団職員という社会人となって感じるところです。練馬高校生活の思い出はソーラン節の練習と競演により座員の方々と親しくなった「わらび座」や球技大会・ロードレース。そして史跡同好会で田柄川という現在埋められてしまっている川の跡や昔の様子を知るお年寄りに聞き、自転車で探索して調査結果を小冊子にまとめ、銀杏祭で配布して発表した事です。昔もあったと聞いていますが最近のスキー教室の切っ掛けも募集する形で2年生頃から始まっていたと思います。

そして練馬高校がよかった点の一つに先生が一人一人熱心であり補習授業を沢山やって頂いたことです。片岡先生の数学や粒来先生の日曜日中の古典の授業や小林先生の講習、ビートルズを題材にした分かりやすい夏期英語講習、そして何と言っても三上先生の世界史の夏休みや授業が終ってから旺文社のテストを利用した補習により実力が付きました。

今思うと大学や社会人を通じてある意味での自信は高校時代の補習授業によるところが大きいと感謝しています。

ところで同窓会に参加した切っ掛けは練馬高校の改築が3年生の夏から始まり卒業したので創立30周年新校舎落成記念行事を契機に高校に足を運んだのですが校舎は天文台も出来新しく立派なのに驚きました。新しい意味での落成式だったのですがなによりも卒業生が大勢集まり懐かしく、社会人となったのを機に今年から参加させて頂いています。参加して思った事は7回生9回生と明るく11回生の真面目な雰囲気という様に世代ごとに分かれて昔の話も聞けてとても楽しいです。私と同期でも（今でもみんな仲の良い）書道の2クラスや3年生の時のクラス会がありますが、これからも同窓会を含め続けてお付き合いして行きたいと思っています。よろしく御願いします。

「心に残った思い出」

重光　理英（二十七回生）

私は、高校に入ってから茶道部に入部しました。入部した当初は、先輩から教えてもらい、覚えるのに一生懸命でした。特に一番大変だったのは、文化祭の時でした。一週間前は、毎日が練習の繰り返で、その間に、ポスター作り・チケット作りをしたりと一日が過ぎるのが早かったです。一年の時は、初めての文化祭ですごく緊張していて、頭の中は間違えないようにと考えていました。お点前が始まってからは、ずっと手が震えていたのを覚えています。

二年、三年になると少しは慣れて自分のお点前に余裕が出て来た。特に三年は、裏で仕事をする事が多く新入部員と二年生に任せていました。そして、部員全員で一つの事をやり終えた時は、心にすごく大きな満足感が出来て、本当に茶道部に入ってよかったと思いました。だから、文化祭の後の打ち上げはとても楽しかったのを覚えています。

卒業してからは、ずっと茶道はやっていませんが、茶道部で夢中になっていた時と同じように、今、私は福祉の専門学校で介護福祉士を目指して勉強しています。

「From the Teachers」

蝶が舞っていた春日町

青木　一男（国語科担当）

川越街道を折れて石神井の方への道を進んだとき、青空が急に暗くなるほど濃くなって、一面に真白い蝶が乱舞し始めた。一瞬、私は不思議の国に迷い込んだのかと思った。じっと心を静めると春の畑道だった。――これは三十余年前、当時板橋に住んでいた私が、石神井に住む恩師をお訪ねした途上での思い出である。

それから数年後の昭和四十年の春、私は鷺宮高校から練馬高校に転任した。その翌年、新校舎が春日町に建った。そこは、あの蝶が舞っていた畑の中であった。そして今は、平成の校舎が建っている。

私は練馬高校に十八年も勤務させていただき、一回生、五回生、九回生、十五回生の諸君を担任することができた。今でも卒業生の顔を思い出すことがよくある。授業中のこと、クラブ活動のこと、学校行事のこと。そしてPTAの皆さんのこと。

母校はよいものだ。同窓会を通して心の絆を強くしていきたいものである。私は今春六十三になるが、まだまだ元気で、大学の教壇に立っている。この短信がきっかけで、皆さんから楽しいお便りをいただけたらと願っている。会員各位のご活躍を祈りつつ。

練馬高校の頃

中島　康夫（社会科担当）

私が練馬高校に赴任したのは、昭和五十三年四月だった。それに先立って、事務連絡やら引継ぎやらで練馬高校を訪れた時から、旧校舎の中庭の端にあった木蓮の木が白いあでやかな花を咲かせていて強い印象を受けたのを憶えている。それから、毎年、春になるとその白い花はあでやかに咲いた。そして、その度に私は練馬高校赴任当時の事、倫社の授業で発表学習をやり生徒を苦しめたらしいことや、映研の部員とお金を出しあって発声映写機を買い、生活指導部の上原先生が心配される程遅くまで活動したことや、翌年、一年の担任になり文化祭で「お化け屋敷」を真夏並の暑さの中でやり、クラスのほとんどの生徒が参加してうれしかったことや、等々、なつかしく思い出した。しかし、私が現任校（大泉学園高校）へ転任する年だったか、その前年からだったか、校舎の改築のためだったと思うが、その木は切られてしまい、そのあでやかな白い花も見ることができなくなってしまった。そして、その間に練馬高校も大きく変わっていた。生徒が全て制服になり、入試制度も変わり、そして時代も大きく変わっていた。

練高大好き人間

津久井富造（国語科担当）

私の十七年にわたる練高での思い出の中でY君の存在は小さくない。

Y君は十八回生。本来なら卒業生名簿に載るはずだが、事情があって別の定時制に移り、そこを卒業した。彼は一年七組・二年九組でともに私が担任であった。

Y君は人気者だった。ユーモアと機知に富み、球技大会後の教室での打ち上げで、ジュースの「一気飲み」をたくらみ、まわりを笑わせた。（私はこの時、初めて「イッキ・イッキ」のコールを耳にした。）スポーツは万能、その上人情味が厚く、誰かが困っていると、自分を放っておいて面倒を見る。そして底ぬけに明るく、ちょっと寂しがり屋。そんなY君をみんな大好きだった。

しかし彼は二年生をダブることになってしまった。それでも彼は仲間が好きで、修学旅行も二回行った。

昨年秋、一年七組・二年九組の合同クラス会の知らせが届いた。幹事役は何とY君であった。当日は遠方に嫁いで子育て中の女子も多数参加して、懐かしくも楽しい会になった。幹事役Y君の人徳による所が大きい。

Y君は口に出さぬが練高をこよなく愛しているに違いない。この記事が載る同窓会報が、何らかの形で彼のもとにも届けられるといいのだが……。

「思い出」

稲葉　栄（社会科担当）

私の教員生活の最後が練馬高校で平成三年三月の定年退職まで実に二十二年間在職しました。それだけに思い出は深い。

私が赴任した当時は練馬高校も創立五年目、未だ三年は六学級構成だった、施設も体育館が竣工したばかり、さらにその年の九月にはプール工事に着工するなど学校の基盤は着々と整備される途上で、何もかも初々しかった。学校の周辺も畑や空地が多く近くの幼稚園児などがよく芋堀りなどしている風景も見られた。何よりも思い出すのが、春先きなど強い風が吹くと授業中に砂埃が舞い込んできたりして閉口させられたことなどである。また当時の生徒たちは、活発で何ごとにも旺盛で「やってやろう」という気力があった。勿論勉強にも、卒業時の進路を見てもすばらしく、今日の名門大学にも随分入っている。四十年代後半の学園紛争も思い出の一つ、「教育について」、「卒業式について」、など生徒たちと真剣に考えたこと、今日にして思えば苦労も多かったが教えられたことも随分あった、それらはその後の指導に役立ったものである。その頃の生徒たちはもう四十路に達しようとしてる筈、今どのように回顧しているだろうか、懐しく思い出す。

ハーイ！あの七回生、同期会報告で～す。

――七回生、近藤レポート――

私達同期七回生は、元来遊び好き宴会好きで同窓会等のパーティの時には、いつも出席者が多い方でした。誰かが結婚をすると言っては集い、広い友人の家の庭で焼肉パーティをしては二十名余りの人が顔を出すといった具合です。でも、今回の同期会程多くの人を集めたのは始めてです。意外にビックリ「卒業二十周年を祝う集い」と銘打った今回は、なんと出席は五十余名と言う盛大な会となりました。素敵な彼は今何処に……とか、彼女は今三人の子持ちで目を吊り上げて育児をしているよ。なんて会話の切れる事がなく、二時間のパーティでは収まらず二次会、三次会、と延々七時間も続きました。中には、卒業以来二十年ぶりという人もいてまだまだ話足りない様子で散会したので、また来年も……なんて言う話も有りました。とにかく本当に同期会を開いて良かったと思いました。二十年の歳月、腹の出た人もいれば、しわが増えた人もいる。白くなった人もいれば、少なくなった人もいる。でも恥ずかしがらないで、集まりましょう。こんな楽しい時を過ごせるのなら。

同期会七回生の人々

ちなみに、
会の名称　「七回生卒業二十周年を祝う集い」
場　所　学士会館に於いて（神田一つ橋）
日　時　一九九三年八月二十九日　午後一時～
参加者　同期生五十名（卒業総数　三七七名中）
担任教諭　四名
なお、現住所が不明で連絡の取れなかった人およそ百名位ありました。申し訳ありませんでした。
以上、七回生同期会幹事代表　近藤邦夫でした。
ではまた御合いしましょうネ。

――ある卒業生の、現在（いま）――「子供を育てるって何だろう」

藤城　祐子（旧姓鈴木・七回生）

十年前に、練馬高校のそばに引越してきました。畑がまだたくさん残っていて、私が高校に通学していた時と、ほとんどかわっていなかったので、驚きました。

母親(私)が働いているので、子供は保育園のお世話になりました。体の丈夫な子で、熱も出さず、すくすくと育っていきました。

小学校に入学して、学童クラブと学校生活の両立はかなり負担だったらしく、一年生の時は、高熱を出して、休むこともありました。

四年生になったら、学童クラブは卒業です。ある時のこと、学校から帰って熱があったらしく、(仕事を終えて帰宅したら)部屋の中で掛フトンにくるまって寝ていました。その時には、ほんとうにかわいそうで涙が出ました。何度仕事をやめようと思ったことか……。

家族の協力と支えがあってこそ、仕事が続けられたと思っています。子供を育てたというより、子供と一緒に自分も成長してきたと感じています。

原稿・写真大募集！

クラス会・ＯＢ会等の写真・原稿（400字～800字）をお寄せ下さい。次回同窓会会報発行時に掲載致します。懐かしい仲間との楽しい場面をお待ちしております。氏名・住所・卒年などを明記してお送り下さい。

送り先⇨第７面の事務局あてまで、どうぞ。

同窓会々員の情報収集にご協力下さい!!

現住所の判らない会員の方がいらっしゃいます。ご存じの方がいらっしゃいましたら、返信ハガキか封書で、卒年・組・住所・氏名・電話番号をお知らせ下さい。よろしく御願い致します。

送り先⇨第７面の事務局あてまで、どうぞ。

横書きコーナー

同窓会の運営には、たくさんの人手が必要ですが今までは一部の有志・ボランティアにより運営されていたので、連絡が不十分であったり、活動がなかったりで、同窓会の組織として成り立っていませんでした。（右の様な組織は、見たことも聞いたこともない――という人がほとんどです）同窓会としての組織を構築し、恒常化していくことは何年も要しますが、少しでも親しみがあり、存在感のある生々とした同窓会にするために、下記の活動を考えています。

1．５年に１度の名簿発行
2．１年に１度の会報発行
3．総会の開催（卒業生全員による運営に関する意見交換・意志決定の場。理事会の報告も行われる…）
4．懇親会の開催（いわゆるクラス会・同期会は、自主的にやって下さい）
5．その他事業の企画・開催（の可能性）など

―略図例―

大募集!!

そこで、協力者を多数募集しています。都合のいい時だけでも結構ですからご連絡を下さい。ぜひ参加して下さい。手伝って下さい。みんなでより良いものを創っていきましょう。また、この会報の反応によっては1995年度の総会と懇親会を大々的に（例えば）ホテルの様な所でやりたい?!――と思っています。（会員のみなさまの御協力しだいですネ）

よろしく御願い致します。～事務局より～

（なお、同期会の開催などには同窓会としても出来る限り協力いたしますので、御一報下さい。また、開催後出席者名簿や新たに住所・連絡先の判明した方がいましたら、必ずご連絡下さい。同窓会名簿への訂正と確認をいたします。）

御連絡方法　⇦　おっと大注意！

（P1、P6よりつづく）

タイトル応募先も

現在、仮の事務局には、専従者がおりません。つきましては、ご連絡先は（〒179）練馬区春日町4-28-25 都立練馬高校同窓会再建事務局まで、総会の出・欠返信ハガキをお送り下さい。
また、今回募集中の「会報のタイトル」応募先も、同所（上）へお送り下さい(尚、TELでのお問合せは、ご遠慮下さい)。また、その他のハガキやお手紙なども結構ですョ。

また、応募された「会報タイトル」が、同名複数の場合には抽選で、御１名様に決定いたします。あしからず……よろしく。

ガンバル!! 再建事務局のスタッフです

会計報告(概要)

会計担当　矢野　正弘
(十一回生)

大変簡単ではありますが、この紙面をかりまして92年度決算書と93年度予算（総会承認）を御報告致します。ご一考の程よろしく御願い致します。（何か御意見等ご在いましたら、再建事務局まで御連絡下されば幸いです。P7下段参照。）…では、本年度もまたよろしく御願い致します。

会計報告書

1．'92年度決算書

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	10,791,652	総会費	224,790
入会金(309名*1800円)	556,200	事務費	8,250
総会収入	0	本部費	51,500
利息収入	1,626,965	通信費	991,533
その他	10,800	寄付金	3,376,465
		次年度繰越金	8,333,079
合計	12,985,617	合計	12,985,617

2．'93年度予算 (93.5月の総会にて承認されたものです)

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	8,333,079	総会費	600,000
入会金(274名*1800円)	493,200	本部運営費	10,000
利息収入	272,380	会報出版費	1,000,000
総会費	0	通信費	10,000
	0	事務費	5,000
	0	寄付金	0
		その他	0
		次年度繰越金	7,473,659
合計	9,098,659	合計	9,098,659

信用金庫

巣鴨信用金庫	定期預金	NO31823	¥5,000,000
巣鴨信用金庫	定期預金	NO5480	¥2,558,249
巣鴨信用金庫	普通預金	NO88395	¥774,830
合計			¥8,3333,079

会員名簿最終受付　いよいよ発刊!!

名簿予約　予約限定販売　一冊 5,250（送料・消費税込）
次回の名簿発刊は、5年後になりますので、お申し込みお忘れの方は4/28(木)までに下記フリーダイヤル(料金無料) 0120－109084にお申し込み下さい。
フリーダイヤル受付時間　平日　10：00～16：00

会員の皆様へお願い

同窓会再建事務局より

―「会報」出版費用について―

同窓会再建事務局では、会員相互の親睦をより深めるために、会報の定期発行の実現を予定しておりますが、会報発行には、制作費・印刷代等多大の費用がかかります。つきましては、やむをえず会報発行の協力費として会員有志の皆様方に下記のような募金・カンパを御願いすることに致しました。大変お手数ではありますが、同封致しました用紙でお近くの郵便局より、お払込み下されば幸いに存じます。

一、募金団体　東京都立練馬高等学校同窓会再建事務局
二、目　的　同窓会会報の定期刊行（年一回）
三、使　途　会報発行に要する経費（郵送費を除く）
四、期　間　会報発送日より一ヶ月内
五、金　額　一口二、〇〇〇円より（一口未満でもありがたくお受けいたします）

どうか御理解・御協力のほど、よろしく御願い致します。

編集後記

「また、出しゃばった私。」

鹿島　慶高
(七回生)

やはり、それも春だった。一昨年の春、母校練馬の同窓会が〝壊滅状態〟になっているのを知って、何とも言えない淋しい気持がした。特別「愛校(高)心」の強いタイプでもないのに、何故そう感じちゃったのか？不思議だった。

現在、日本の都市に生活する先進的？人間達の「故郷」の崩壊を、まざまざと感じる思いがした。やっぱり、世紀末なのか。

だが、かといってノスタルジーにひたる事なく、できる限り前向きに、人とのかかわりが豊かである様に、より自由に有機的にふれあえる事(チャンス＝同窓会)を大事にしたいな、と思っている…。

で、私は今回もつい、出しゃばってしまったのである――。

なお今回の奇跡?!とも思える会報創刊にあたり、多くの方々の御理解と御助力を得ました事、誠に有り難く感謝をしております。この紙面をおかりしまして末筆ながら、お礼申しあげます。今後ともなお一層の御支援の程よろしく御願い致します。（不備な点、お許し下さい。）

※なお、紙面内写真撮影は全て、鹿島慶高(七回生)。編集、制作協力は、情報出版㈱によった。